

インドの仕立て屋さん

太陽系第三惑星地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

ゴールデンウィークも終わった初夏の日。ひとりの青年が、ちゃぶ台の置かれた部屋の窓際で寝そべっている柴犬を撫でていた。不自然なく、けれども少し着崩れがある着物姿からは、彼が普段からそれを着慣れているというのがわかる。

ふと、柴犬が起き上がって口を開いた。

「あ、俺ちよっとコンビニ行つてタバコ買つてくるわ」

普通であれば、犬が人の言葉を喋るだなんて驚くような事なのだが、青年は全く驚く様子も見せず、棚に手を伸ばして風呂敷を取り出す。

「コンビニは良いけど、鎌谷君は禁煙した方が良いんじゃない？」

そう言いながら、風呂敷で小銭財布と煙草とライターを包む。それを受け取った鎌谷と呼ばれた柴犬は、くると首に巻いて二本脚で立ち上がる。

「まったくよー、俺の楽しみ奪おうとすんなよ。」

悠希だつて本買うのやめろって言われたら困るだろ？」

「まあ困るけど、本は読んでも健康被害ないから……」

「置く場所に困るだろ」

「うう、そうだけど」

それじゃあ行つてくると言い残して玄関に向かう鎌谷を、悠希が見送る。玄関から気配が消えたのを確認し、ちゃぶ台の上に置かれたハードカバーの本を手取る。その本には、オリエンタルな柄がプリントされた布と、それで作られたドレスの写真が載っている。過去に貿易で西洋へと運ばれた、インドの綿布の本なのだ。

ふと、賑やかな音が流れ始めた。悠希は慌ててパソコンラックの上へと手を伸ばし、青い折りたたみ式の携帯電話を手に取り広げる。

通話ボタンを押し電話に出ると、近頃聞き慣れた声が聞こえてきた。

『もしもし悠希さん、こんにちは』

「カナメさんこんにちは。何かあった？」

カナメというのは、悠希と同じアパートに住んでいる友人で、いつも通っている病院で知り合った。同じアパートに住んでいると言っても、用事がある時に直接部屋に行く前に、必ず電話で連絡を取り合っている。

る。

『実は、サリーを作りたいんだけど、僕ひとりだと必要な時まで間に合わなさそうなんだ。

だから、悠希さんにも手伝って貰えたらって思ったんだけど……忙しいかな？』

「サリーかぁ、納期はどれくらい？」

『今週末に使うから、三日くらいかなあ』

「ああ、それだと確かにひとりだとつらいね。材料はある？」

悠希は必要事項をカナメに訊ね、布はこれから買いに行くという事、それから、もし助っ人を他にも頼めそうなら頼みたいという事を聞き出した。

「わかった。こっちでも縫い物できそうな人に声をかけてみるけど、ダメかも知れないって言うのはあらかじめ言うておくね」

『うん、ありがとう。本当に助かるよ。それじゃあこれから布屋さん行くからこれで』

「うん、いってらっしゃい」

通話が切れ、部屋の中がまた静かになる。ぼんやりとちゃぶ台に乗せた本を見て、縫い物をするなんて久しぶりだなあと、そう思った。

そして翌日、悠希は最寄り駅の改札前に、鎌谷と一緒に佇んでいた。今回無事に助っ人を頼めたので、その出迎えた。

待ち合わせ時間の十分ほど前に、ホームから流れてくる人並みの中に見知った顔を見付けた。それはオペラピンクのはねっ毛を、ヘアピンで押さえている男性。人懐っこい笑みを浮かべて手を振る彼に、悠希も手を振り返す。

「よう、悠希も鎌谷も久しぶり」

「緑君久しぶり。急に呼んじやってごめんね」

「まさかお前が裁縫できるとは思ってたから俺がびっくりだよ」
緑と呼ばれた男性は、悠希と鎌谷の出迎えに嬉しそうだ。再会の喜びは歩きながら味わおうという事で、ふたりと一匹は早速改札前から離れる。駅構内のATM側に有る階段を降り、バス通りを歩く。暫く悠希と鎌谷が緑を先導して歩き、アパートに着いた。入り口近くに

ある階段を上り、三階に差し掛かったところで、鎌谷が言う。

「それじゃあ、これから布物扱うんじゃ俺居ない方が良いだろ。家で寝てるわ」

「うん、そうだね」

袂から部屋の鍵を取り出した悠希が、階段のすぐ側に有るドアのロックを外し、開く。そのまま部屋の中に入ろうとする鎌谷のほったたを、名残惜しそうに緑が揉んでいる。

「折角会ったのになあ。またあとでな」

「おう、頑張ってこい」

簡単なやりとりをしてから、鎌谷は部屋の中に入り、残ったふたりはそのまま奥の部屋へと向かう。突き当たりにある角部屋のドアベルを押すと、インターホンから声が聞こえたので返事をし、それからすぐにドアが開いた。

「悠希さん、いらっしゃい」

そう言って出てきたのは、金髪をボブに纏めた、背が低く華奢な男性。小柄な体格と、本人は自覚していないようなのだが、悠希からす

れば目を引かれずにはいられない整った顔立ちで、一見して女性に見える。

「こんにちは、カナメさん。

今日は無事に助っ人を頼めたから、友達も連れてきたよ」

「そうなの？ 助かるなあ」

そのやりとりを、緑は驚いた顔で見ている。それに気づいた悠希は、確かにこれだけ綺麗な人はそうそう居ないから、緑も驚いているのだろ
うなど思ったのだが、予想外の言葉が緑から出てきた。

「え……？ なんて柏原かしわらと悠希が知り合いなん……？」

「えっ？ 竜りゅうヶ崎がさき君？ えっ？ なんて悠希さんの知り合いなの？」

柏原というのはカナメの姓で、竜ヶ崎というのが緑の姓だ。何故このふたりはそれを知っているのだろう、何故面識があるのだろうと悠希も驚きを隠せない。みんながみんな、一体どう言う繋がりなのかかわからなくなり、取り敢えず知らない人というわけでもないのだから、一旦部屋の中に入って作業をしながら、事情の説明をしようという事になった。

